

【 復活讃詞 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリヤはか  
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立 爾 潔 體 尋

た たり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりにし、いのちをた賜  
 地 獄 虞 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにき 歸 す。

【 十字架擧榮祭の讃詞 第1調 】

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ  
 主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、わがくに  
 業 福 降 我 國

さいわいをあたえ、なんぢのじゆうじかに  
 福 與 爾 十 字 架

て なんぢのすまいをまもりたまえ。  
 爾 住 處 守 給

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとこ と せいしんにき  
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸

す、

しととひとしくどうざなるもの、ちゆう  
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛

にみちた るうつわ、わがくにのこう  
 満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきようせいニコライ  
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのたあめ、および  
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのた めに、いのちを たも う せい  
 全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃに いのり たま え。  
 三者 祈 給

【 十字架擧榮祭の小讃詞 第4調 】

いまもいつ も よよ に、アミ ン。  
 今 何時 世 世

あまんじてじゅうじかにあげられしハリストスかみ  
 甘 十 字 架 擧 神

よ、なんぢが どうめいのあらたなるすまいに  
 爾 同 名 新 住 處

なんぢのじれんをたまえ、なんぢのちからを  
 爾 慈 憐 賜 爾 力

も っ て わがくにをたのしましめててき  
 以 我 國 樂 敵

にかたしめたたまえ、かれはなんぢのたす  
 勝 給 彼 爾 援 助

けとしてへいあん**の**ぶき、かたれぬはたをた  
 平 安 武 器 勝 旗 有

もてばなり。

司祭) ( 黙誦： せい かみ せいじゃ うち いこ せいさん こえ もつ かしょう  
 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃<sup>さんえい</sup>榮<sup>ことごと</sup>せられ、<sup>てんぐん</sup> 悉<sup>ふくはい</sup> くの天<sup>ぼんぶつ</sup> 軍<sup>む</sup> より伏<sup>ゆう</sup> 拝<sup>む</sup> せられ、<sup>む</sup> 萬<sup>ゆう</sup> 物を無<sup>む</sup> より有<sup>ゆう</sup> と  
 なし、<sup>ひと</sup> 人<sup>なんぢ</sup> を爾<sup>ぞう</sup> の像<sup>しょう</sup> と肖<sup>よ</sup> とに依<sup>つく</sup> りて造<sup>なんぢ</sup> り、<sup>もろもろ</sup> 爾<sup>たまもの</sup> が諸<sup>もつ</sup> の賜<sup>これ</sup> を以<sup>かざ</sup> て之<sup>かざ</sup> を飾<sup>かざ</sup> り、  
 願<sup>ねが</sup> う者<sup>もの</sup> に智<sup>ちえ</sup> 慧<sup>めいご</sup> と明<sup>あた</sup> 悟<sup>つみ</sup> とを與<sup>おこな</sup> え、<sup>もの</sup> 罪<sup>す</sup> を行<sup>す</sup> う者<sup>す</sup> を棄<sup>す</sup> てずして、<sup>そのすくい</sup> 其<sup>ため</sup> 救<sup>つうかい</sup> の爲<sup>つうかい</sup> に痛<sup>つうかい</sup> 悔<sup>つうかい</sup>   
 を立<sup>た</sup> て、<sup>われらいや</sup> 我<sup>ふとう</sup> 等<sup>なんぢ</sup> 卑<sup>しよぼく</sup> しくして不<sup>こ</sup> 當<sup>とき</sup> なる 爾<sup>おい</sup> の諸<sup>なんぢ</sup> 僕<sup>せい</sup> を、<sup>なんぢ</sup> 此<sup>せい</sup> の時<sup>せい</sup> に於<sup>せい</sup> ても、<sup>せい</sup> 爾<sup>せい</sup> が聖<sup>せい</sup> な  
 る祭<sup>さいだん</sup> 壇<sup>こうえい</sup> の光<sup>まへ</sup> 榮<sup>た</sup> の前<sup>なんぢ</sup> に立<sup>とうぜん</sup> ちて、<sup>ふくはいさんえい</sup> 爾<sup>たてまつ</sup> に當<sup>た</sup> 然<sup>もの</sup> の伏<sup>た</sup> 拝<sup>もの</sup> 讃<sup>もの</sup> 榮<sup>もの</sup> を 奉<sup>もの</sup> るに堪<sup>もの</sup> うる者<sup>もの</sup> と  
 なしし主<sup>しゅさい</sup> 宰<sup>なんぢ</sup> よ、<sup>なんぢ</sup> 爾<sup>われら</sup> 親<sup>みづか</sup> ら我<sup>われら</sup> 等<sup>ざい</sup> 罪<sup>ざい</sup> 人<sup>ざい</sup> の口<sup>くち</sup> よりも聖<sup>せい</sup> 三<sup>さん</sup> の歌<sup>うた</sup> を受<sup>う</sup> け、<sup>なんぢ</sup> 爾<sup>じんじ</sup> の仁<sup>じんじ</sup> 慈<sup>じんじ</sup> を  
 以<sup>もつ</sup> て我<sup>われら</sup> 等<sup>のぞ</sup> に臨<sup>われら</sup> み、<sup>およ</sup> 我<sup>じゆう</sup> 等<sup>じゆう</sup> に凡<sup>じゆう</sup> そ自<sup>じゆう</sup> 由<sup>じゆう</sup> と自<sup>じゆう</sup> 由<sup>じゆう</sup> ならざる罪<sup>つみ</sup> を赦<sup>ゆる</sup> し、<sup>わ</sup> 我<sup>たましい</sup> が靈<sup>からだ</sup> と體<sup>からだ</sup> と  
 を聖<sup>せい</sup> にし、<sup>われら</sup> 我<sup>しょうがいぜんこう</sup> 等<sup>もつ</sup> に生<sup>なんぢ</sup> 涯<sup>つと</sup> 善<sup>え</sup> 功<sup>たま</sup> を以<sup>せい</sup> て 爾<sup>せい</sup> に務<sup>せい</sup> むるを得<sup>せい</sup> せしめ給<sup>せい</sup> え、<sup>せい</sup> 聖<sup>せい</sup> なる  
 生<sup>しょうしんぢよ</sup> 神<sup>こせい</sup> 女<sup>なんぢ</sup> と古<sup>よろこび</sup> 世<sup>な</sup> より 爾<sup>しよせいじん</sup> の 喜<sup>きとう</sup> を爲<sup>よ</sup> しし諸<sup>よ</sup> 聖<sup>よ</sup> 人<sup>よ</sup> との祈<sup>よ</sup> 禱<sup>よ</sup> に依<sup>よ</sup> りてなり、 )

司祭) 蓋<sup>けだしわ</sup> 我<sup>かみ</sup> が神<sup>なんぢ</sup> よ、<sup>せい</sup> 爾<sup>われら</sup> は聖<sup>こうえい</sup> なり、<sup>なんぢ</sup> 我<sup>なんぢ</sup> 等<sup>ちち</sup> 光<sup>こ</sup> 榮<sup>せい</sup> を 爾<sup>けん</sup> 父<sup>けん</sup> と子<sup>けん</sup> と聖<sup>けん</sup> 神<sup>けん</sup> に献<sup>けん</sup> ず、<sup>いま</sup> 今<sup>いつ</sup> も何<sup>いつ</sup> 時<sup>いつ</sup> も世<sup>よ</sup> 世<sup>よ</sup>

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じょう せいの ものよ、 われら を あわれ め  
 常 生 者 我 等 憐  
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 な る じょう せいの ものよ、 われら を あわれ  
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 れめよ。こうえいはちちとこせいしん  
 にかす、いまもいつもよよに、アミン。  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 あわれめよ。

司祭) ( 黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 十字架擧榮祭の提綱 (プロキメン) 第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾神

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>しゅ わ かみ あが ほ そのあしだい ふ おが こ せい</sup> プロキメン、主、我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり、



しゅ わ かみ を あが め ほ め 、 その あし だ  
主 我 神 崇 讃 其 足 台  
い に ふ し お が め よ 、 これ せい な り 。  
伏 拜 是 聖

誦經) <sup>しゅ おう しょみんおのの</sup> 主は王たり、諸民戦くべし、



しゅ わ かみ を あが め ほ め 、 その あし だ  
主 我 神 崇 讃 其 足 台  
い に ふ し お が め よ 、 これ せい な り 。  
伏 拜 是 聖

誦經) <sup>しゅ わ かみ あが ほ</sup> 主、我が神を崇め讃め、



その あし だ い に ふ し お が め よ 、 これ せい  
其 足 台 伏 拜 是 聖  
な り 。

【 使徒經 (アポストロス) 176 端 コリント後書 4 章 6～15 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ こうしょ よみ</sup> 聖使徒パヴェルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい くらやみ ひかり て めい かみ われら ころろ たら</sup> 兄弟よ、暗より光の照ることを命ぜし神は、我等の心を照せり、イイススハリ  
<sup>おもて かみ こうえい し ちしき もつ われら かがやか ため しか われら</sup> ストスの面にある神の光榮を知る知識を以て我等を輝さん爲なり。然れども我等は

こ たから つち うつわ おさ ばくだい ちから かみ よ われら よ ため われらしほう  
 此の 寶 を土の 器 に藏む、莫大の 能 が神に由りて、我等に由らざらん爲なり。我等四方  
 より患難を受くれども、窮せず、險しき境に處れども、望を失わず、窘逐せらるれ  
 ども、棄てられず、倒さるれども、亡びず。常に身に主イイススの死の状を佩ぶ、イイス  
 スの生命も我等の身に顯れん爲なり。蓋我等生ける者は、常にイイススの爲に死に付さる、  
 イイススの生命も我等の死すべき肉體に顯れん爲なり。是くの如く死は我等の中に 行い、  
 生命は爾等の中に 行うなり。然れども録して、我信ず、故に言えりと、あるが如く、我  
 等も此くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言う、主イイススを復活せしめし者は、イ  
 イスを以て我等をも復活せしめ、且爾等と偕に己の前に立たしめんことを知るに因る。  
 蓋萬事は爾等の爲なり、豊かなる恩寵が、多くの人の感謝に由りて、神の光榮の  
 溢るるを致さん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかに  
 するために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中  
 に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あ  
 らわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まら  
 ない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うてい  
 る。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。わたしたち生きている者は、イエ  
 スのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体  
 に現れるためである。こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くの  
 である。「わたしは信じた。それゆえに語った」としてあるとおりに、それと同じ信仰の霊を持っ  
 ているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである。それは、主イエスをよみがえらせ  
 たかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて  
 下さることを、知っているからである。すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます  
 多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。

\*\*\*\*\*

【 使徒經 (アポストロス) 203 端 ガラティヤ書 2 章 16～20 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄<sup>けいてい</sup> 弟<sup>ひと</sup> よ、人<sup>りつぼう</sup> は律<sup>おこない</sup> 法<sup>よ</sup> の行<sup>あら</sup> に由<sup>ただ</sup> るに非<sup>しん</sup> ず、唯<sup>よ</sup> イイス<sup>ぎ</sup> ス ハリス<sup>しん</sup> トスを信<sup>よ</sup> ずるに由<sup>りつぼう</sup> りて義<sup>ぎ</sup> とせらるるを<sup>し</sup> 知<sup>われら</sup> りて、我<sup>しん</sup> 等<sup>しん</sup> もハリス<sup>しん</sup> トス イイス<sup>よ</sup> スを信<sup>りつぼう</sup> ぜり、ハリス<sup>しん</sup> トスを信<sup>よ</sup> ずるに由<sup>りつぼう</sup> り、律<sup>しん</sup> 法<sup>よ</sup> の行<sup>りつぼう</sup> に由<sup>おこない</sup> らずして、義<sup>ぎ</sup> とせられん爲<sup>ため</sup> なり、蓋<sup>けだしりつぼう</sup> 律<sup>おこない</sup> 法<sup>よ</sup> の行<sup>よ</sup> に由<sup>ひとひとり</sup> りては、人<sup>ぎ</sup> 一<sup>ぎ</sup> も義<sup>ぎ</sup> とせらるるなし。若<sup>も</sup> し我<sup>われら</sup> 等<sup>よ</sup> ハリス<sup>ぎ</sup> トスに由<sup>よ</sup> りて義<sup>ぎ</sup> とせられんこと<sup>もと</sup> を求<sup>みづから</sup> めて、自<sup>なおざいにん</sup> も猶<sup>あに</sup> 罪<sup>あに</sup> 人<sup>あに</sup> たらば、豈<sup>あに</sup> ハリス<sup>あに</sup> トスは罪<sup>あに</sup> の役<sup>あに</sup> 者<sup>あに</sup> たるか。非<sup>あに</sup> らず。蓋<sup>あに</sup> 若<sup>あに</sup> し我<sup>あに</sup> が毀<sup>あに</sup> ちたる者<sup>あに</sup> 、我<sup>あに</sup> 復<sup>あに</sup> 之<sup>あに</sup> を建<sup>あに</sup> てば、則<sup>あに</sup> 己<sup>あに</sup> の罪<sup>あに</sup> 人<sup>あに</sup> たるを<sup>あに</sup> 示<sup>あに</sup> すなり。我<sup>あに</sup> 律<sup>あに</sup> 法<sup>あに</sup> に由<sup>あに</sup> りて律<sup>あに</sup> 法<sup>あに</sup> の爲<sup>あに</sup> に死<sup>あに</sup> せり、神<sup>あに</sup> の爲<sup>あに</sup> に生<sup>あに</sup> きん爲<sup>あに</sup> なり。我<sup>あに</sup> ハリス<sup>あに</sup> トスと共<sup>あに</sup> に十<sup>あに</sup> 字<sup>あに</sup> 架<sup>あに</sup> に釘<sup>あに</sup> せられたり。既<sup>あに</sup> に我<sup>あに</sup> 生<sup>あに</sup> くるに非<sup>あに</sup> ず、即<sup>あに</sup> ハリス<sup>あに</sup> トスは我<sup>あに</sup> の中<sup>あに</sup> に生<sup>あに</sup> くるなり。我<sup>あに</sup> が今<sup>あに</sup> 肉<sup>あに</sup> 體<sup>あに</sup> に在<sup>あに</sup> りて生<sup>あに</sup> くるは、我<sup>あに</sup> を愛<sup>あに</sup> して我<sup>あに</sup> が爲<sup>あに</sup> に己<sup>あに</sup> を捨<sup>あに</sup> てし神<sup>あに</sup> の子<sup>あに</sup> を信<sup>あに</sup> ずるに由<sup>あに</sup> りて生<sup>あに</sup> くるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。しかし、キリストにあつて義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるとすれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

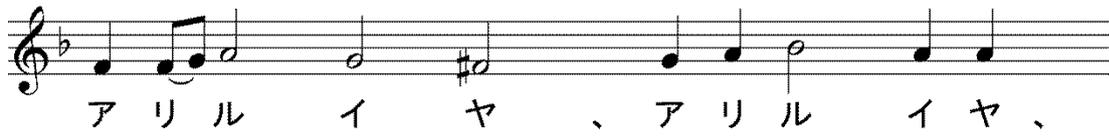
\*\*\*\*\*

司祭) 爾<sup>なんぢ</sup> に平<sup>へい</sup> 安<sup>あん</sup>、

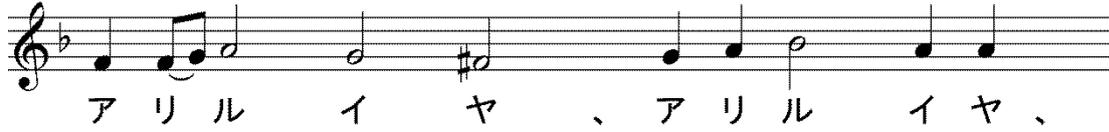
誦經) 爾<sup>なんぢ</sup> の神<sup>しん</sup> にも、ア ril li ya、

【 十字架擧榮祭のア ril li ya 第1調 】

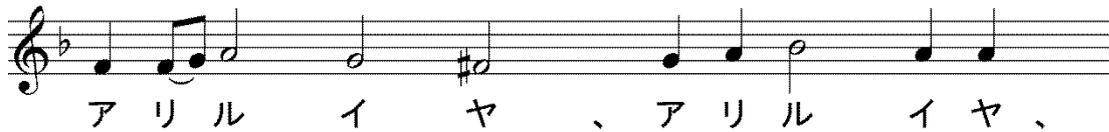
司祭) 睿<sup>えい</sup> 智<sup>ち</sup>、



誦經) <sup>なんぢ いにしえ え かい きおく</sup> 爾が古より獲たる會を記憶せよ、



誦經) <sup>かみ わ こせい おう すくい ち なか な</sup> 神、我が古世よりの王は救を地の中に作せり、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書87端 21章33~42節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ<sup>でん</sup>傳<sup>せいふくいんけい</sup>の聖福音<sup>よみ</sup>經の讀、



司祭) 謹<sup>つつし</sup>みて聽<sup>き</sup>くべし、

司祭) 彼の時<sup>か</sup>一人<sup>ときひとり</sup>の律法師<sup>りつぽうしかれ</sup>彼を<sup>こころ</sup>試<sup>と</sup>みて、問いて曰<sup>い</sup>えり、師よ、律法<sup>し</sup>の中<sup>りつぽう</sup>に何<sup>うち</sup>の誠<sup>いづれ</sup>か大<sup>いましめ</sup>

なる。イスス之<sup>これ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>心<sup>こころ</sup>を盡<sup>つく</sup>し、靈<sup>たましい</sup>を盡<sup>つく</sup>し、意<sup>おもい</sup>を盡<sup>つく</sup>して、主<sup>しゅ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>の神<sup>かみ</sup>を

愛<sup>あい</sup>せよ、此<sup>こ</sup>れ誠<sup>いましめ</sup>の第一<sup>だいいち</sup>にして大<sup>おお</sup>なる者<sup>もの</sup>なり。第二<sup>だいに</sup>は是<sup>これ</sup>に同じ<sup>おな</sup>き者<sup>もの</sup>、即<sup>すなわち</sup>爾<sup>なんぢ</sup>の鄰<sup>となり</sup>

を愛<sup>あい</sup>すること己<sup>おのれ</sup>の如<sup>ごと</sup>くせよ。斯<sup>こ</sup>の二<sup>ふたつ</sup>の誠<sup>いましめ</sup>には悉<sup>ことごと</sup>くの律法<sup>りつぽう</sup>と預言<sup>よげん</sup>者と繋<sup>しや</sup>れり。フ

アリセイ等<sup>ら</sup>の集<sup>あつま</sup>りし時<sup>とき</sup>、イスス之<sup>これ</sup>に問<sup>と</sup>いて曰<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>ハリストス<sup>こと</sup>の事<sup>いか</sup>を如何<sup>おも</sup>に意<sup>おも</sup>うか、

彼<sup>かれ</sup>は誰<sup>だれ</sup>の子<sup>こ</sup>なるか。曰<sup>いわ</sup>く、ダヴィド<sup>こ</sup>の子<sup>かれ</sup>なり。彼<sup>しか</sup>曰<sup>い</sup>く、然<sup>い</sup>らば如何<sup>い</sup>ぞダヴィド<sup>せいしん</sup>は、聖<sup>よ</sup>神<sup>せいしん</sup>に由<sup>よ</sup>

りて、彼<sup>かれ</sup>を主<sup>しゅ</sup>と稱<sup>とな</sup>うる、云<sup>いわ</sup>く、主<sup>しゅ</sup>我<sup>わ</sup>が主<sup>しゅ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>我<sup>わ</sup>が右<sup>みぎ</sup>に坐<sup>ざ</sup>して、我<sup>わ</sup>が爾<sup>なんぢ</sup>の敵<sup>てき</sup>を

爾<sup>なんぢ</sup>の足<sup>あし</sup>の凳<sup>だい</sup>と爲<sup>な</sup>すに迄<sup>いた</sup>れと。然<sup>しか</sup>らばダヴィド<sup>かれ</sup>彼<sup>しゅ</sup>を主<sup>とな</sup>と稱<sup>い</sup>うれば、如何<sup>い</sup>ぞ彼<sup>かれ</sup>は其<sup>その</sup>子<sup>こ</sup>たる。

ひとりこれ<sup>ことば</sup>を答<sup>こた</sup>える能<sup>あた</sup>わず、是<sup>こ</sup>の日<sup>ひ</sup>より敢<sup>あ</sup>て復<sup>また</sup>彼<sup>かれ</sup>に問<sup>と</sup>う者<sup>もの</sup>なかりき。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

ひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキ

リストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。イエスにひと言でも答える者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。

\*\*\*\*\*

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書 37 端 8 章 34~9 章 1 節 】

司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、謹みて聽くべし、

司祭) 主曰えり、我に従わんと欲する者は、己を捨て、其十字架を負いて我に従え。蓋

己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の爲に己の生命を喪わん

者は、之を救わん。蓋人若し全世界を獲とも、己の靈を損わば、何の益かあらん。

抑人何を與えて、其靈の償と爲さんや。蓋此の姦惡の世に於て、我及び我の

言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖なる天使等と偕に來らん時彼を耻ぢん。

又彼等に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、神の

國が權能を以て來るを見んとする者あり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に來るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の國が力をもって來るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮  
はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③ へ